



神の母聖マリア (ルカ 2:16-21)

神をあがめ、賛美しながらこの一年過ごそう

新年明けましておめでとうございます。新しい年を、どのような形で始めるかはとても大切です。

いろいろな新年の迎え方があるでしょう。ある人々は太陽を拝んで新しい年を始めます。ある人々はお祓いを受けます。ですがわたしたちカトリック信者は、神の母聖マリアをたたえるミサに参加して新しい年の始まりを迎えます。

新成人を迎える方々もおられるでしょう。人生の節目や、記念日を今年迎える人もいます。そうしたすべての人が拝むべきもの、受けることのできる恵みが、ミサに集まったこの場所にあります。そしてわたしたちはそのことを知っているのです、こうして集まっています。

福音朗読は、羊飼いたちが天使に告げられた幼子を探し当てる場面が選ばれました。羊飼いたちが見たのは、単に飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子ではありませんでした。天使が話してくれたことが出来事になっているという、人間では成しえない神の業を見たのです。

ですから羊飼いたちは、人々にこのことを知らせました。み使いの話したことが出来事になっているということは、救い主が生まれた、人間の救いが目の前に現れたということです。すべての人が待ち望んでいたことが実現した。こんなに喜ばしいことはありません。

ところが聞いた者は皆、羊飼いたちの話をも不思議に思うだけでした。話を聞いた人々は、マリアという女性から生まれた幼子は理解できましたが、幼子誕生という表面的なことしか受け入れることができなかったのです。

神の救いの約束が、貧しい夫婦を通して実現したとか、救い主が家畜小屋で飼い葉おけに寝かされた状態でおられるとか、それを知らせているのが羊飼いですとか、さまざまな事情が聞く人の心を曇らせ、理解を妨げたのかもしれない。

しかしマリアは、「これらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた」(2・19)とあります。羊飼いたちが見たものを、マリアも見ました。すなわち、天使が話したことが、出来事となって実現したということ、そして羊飼いたちが、自分たちが見たことをためらうことなく人々に知らせたことです。神の救いは驚くべき形で始まり、必ず人々に知られていくのです。

羊飼いたちの最後の行動にもう一度目を留めましょう。「羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりでだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った」(2・20)とあります。「神をあがめ、賛美しながら帰って行った」とは、生活の中でこれからも神をあがめ、賛美するということです。

羊飼いたちの行動を見て、マリアの賛美の歌を思い出しました。「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。」

(ルカ 1・47) マリアも、神の驚くべき御業を理解した時に神をあがめました。洗礼者ヨハネの父ザカリアも、生まれた子にヨハネと名を付け、話すことができるようになったときに真っ先に神をたたえました。

羊飼いやマリアも、この一年をどのように過ごすのかお手本を示していると思います。わたしたちは教会に集まってミサにあずかり、神がわたしたちの救いのために独り子を与えてくださったことを見ています。

神の言葉が出来事となり、神が与えることのできる最上の恵みが人類に与えられました。わたしたちは出来事となったこの神の言葉を持ち帰り、自分たちが帰っていく生活の真ん中で神をあがめるよう期待されているのです。

わたしたちの日常生活はさまざまな形を取っています。ある人はいちばん長くいる生活の場所が危険と隣り合わせの場所かもしれません。ある人はいちばん長くいる場所は愛する家族かもしれません。ある人は常に結果を求められる場所で長く時間を過ごしているかもしれません。

それぞれの生活の真ん中で、羊飼いやがしたように今日確認したものを告げ知らせしてほしいと思います。すなわち神の言葉は出来事となったということ、この人となった神の言葉は恵みを与えてくれるということ。そして聞いた人々が信じるなら、同じ恵みにあずかることができるということです。

今日は一月一日、神の母聖マリアの守るべき大祝日です。わたしたちは教会に来て、ミサにあずかって一年を始めました。ここで見て確かめたことを、生活に持ち帰り、証ししていく一年としましょう。「見聞きしたことがすべて天使の話したとおりであったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った」(2・20) この生き方を取り入れましょう。

証しをするにあたって、わたしの生活にあてはめると、どのような方法が可能なのか、神の母聖マリアに倣い、思い巡らすことにしましょう。出来事をすべて思い巡らそうとするとき、必要な助けはきっとマリアが一年を通して神に取り次いでくださいます。

主の公現(マタイ 2:1-12)